

強制労働

令部付樺太特務機関勤務

進駐ソ連軍により十年の強制労働を宣告され、ウラジオ経由でイルクーツクへ。

シベリア第二鉄道建設のためタイシエツ

ト周辺の国際ラーゲルを転々と移動する

帰還

昭和二十八年十二月、病気のため帰国。

肋骨六本を切除

職歴

町教育委員三期、地元の会社で社内報の編集、生活相談業務等

表彰

熊日文学賞、西日本芸術奨励賞、九州沖繩文学賞、詩と真実賞、平成十二年度県

芸術功労者顕彰

全抑協活動

昭和五十六年より熊本県連事務局長、平成十一年より会長

(熊本県 池上 俊邦)

シベリア抑留の日々

北海道 阿部 吉蔵

(旧姓 佐藤)

一、終戦

明日、また八月十五日が来る。何回目の八月十五日だろうか。昭和二十(一九四五)年の八月十五日は樺太の豊原(樺太南部 ユジノサハリンスク)において、俺は部隊の建物の裏で、命令された軍の秘密文書を焼却することに懸命だった。その横にある士官室に二人の上官がいて、立ち話をしていた。「これで日本もお終いだな」という言葉が耳に入ってきた。いわゆる玉音放送のことを言っていたのだった。それを聞いて戦争が終わったとわかり、本当にびっくりした。暫くすると今度は、生き残ったんだ、死ななくていいんだ、生きて故郷(くに)へ帰れるんだという喜びが体中に湧いてきた。ソ連軍はもう五〇度線を突破してどんど

んこつちに近づいていた。ドイツとの戦争は五月の初めに終わっていたので、ヨーロッパにあった戦車や飛行機が全部極東に運ばれてきていた。ソ連の戦車のT四〇は三〇トンもあって、ひと抱えもある木などでもバリバリ倒していく。日本のはあっても七、八トン程度のもので、相手にならなかった。大抵は鉄砲だけで戦車に向かっていった。終戦が二、三日遅かったなら、豊原へももの凄いな数のソ連軍が押し寄せてきて、俺はまず命がなかっただろうな。

ソ連軍が国境を越えると、俺たちは大泊（樺太南部コルサコフ）へやらされ、民間人の輸送の任に任された。大泊には北海道へ渡るため、日本人がたくさん押し寄せて来ていた。俺たちは漁船でも何でも全部の船を使って民間人を北海道へ渡そうとした。船の持ち主の中には、自分の家財道具をたくさん積んでいるのがいた。その荷物を船の外へ出して一人でも多くを乗せた。持てる物は身の回りの品物だけに制限した。俺は稚泊連絡船（樺太の大泊と北海道の稚内を結ぶ連絡船）に乗って二回、稚内に来た。すると民間人の護送

についできた兵隊もたくさん、民間人と一緒に降りていった。俺はそのまま樺太に戻った。さらにもう一回、稚内に来た。着くと、すでに、兵隊はすぐに戻せという無線が入っていた。そのときも、そのまま家に帰ると言う者が出た。命令違反じゃないかと言うと、軍隊はもうなくなつたんだから、もう命令だつてなくなつたんだと言ひ返された。そう言つて、何人もそのまま家に帰つてしまつた。おれも一緒に帰つたかつたが、このまま故郷へ帰つたら、後で、あいつは軍を逃げ出した奴だ、あいつは困っている民間人を見捨てた奴だつて言われると思つた。それで再び樺太に引き返した。あのときはもう三十二歳にもなつていたので、ら、もう少し分別あつてしかるべきだつた。

稚内から再び大泊に帰つた直後に、ソ連とアメリカの船や潜水艦が樺太と稚内の間に入り、もう渡れなくなつた。まさかシベリアへ連れていかれるとは思つてもいかなかった。捕虜になつてもせいぜいここに一月位留め置かれるだけで、すぐ帰されると思つていた。現に俺の弟は満州で捕虜になつたが、一、二カ月で

帰っていた。

俺たちは豊原に戻った。八月二十日だったと思うが、豊原空襲の直後、「ソ連機が駅を爆破したらしい。状況を来て来い」と上官に命令された。菊池というのと二人で町へ様子を見に行った。俺たちは駅前に通ずる人けのない道路を一目散に走った。するとソ連軍の飛行機がものすごい低空で飛んできて、バババババ……と機銃掃射した。俺たちはとっさに近くにあった拓銀豊原支店前の防空壕に逃げ込んだ。だが菊池は一瞬遅れ、撃たれて死んだ。平成五（一九九三）年、新聞に、旧拓銀豊原支店のことが載っていた。今は州の美術館になっているが、老朽化し、破損したまま補修もできないでいるという記事だった。

駅前の防空壕はほとんどつぶれていた。北海道に渡るために大泊行きの汽車を待っていた人たちは、何十キロの道のりを苦勞して持ってきた食糧も衣類も投げ捨てて、樺太神社の森へ逃げたというんだ。引き返す途中、足にぶつかって蓋の開いた缶から飛散したのは粉ミルクだった。子供を背負った母親が逃げる途中、

持ち切れなくて捨てたんだろう。今でもあの危機一髪の瞬間と、ミルク缶を捨てた母親の悲痛な心情が、昨日のこのように胸によみがえる。

その時、俺たちのいた建物の前に、樺太がロシア領だった時代のロシア軍の古い建物があった。ソ連軍はまずそれに入った。俺たちは菊池を茶毘だびに付して、建物の中にまつり、線香をあげていた。そこへソ連兵が入ってきて、小さな祭壇を珍しそうに見ていた。日本式のは見たことがないからだ。

暫くすると数人のソ連兵が建物に入ってきて、みんな外へ出ろと言った。外へ出ると、もうたくさんの日本兵が広場に出ている。ソ連兵は、武装解除するから武器は全部広場に置けと言った。みんなそうした。暫くすると、勲章や記章をつけて集合するように言われた。何をさせるつもりか、すぐわかった。そうして行進させて、カメラで撮影し、本国へ送り、ニュース映画に使うんだ。日本でもそうしていた。昔、映画館に入ると、まずニュースがあり、日本が陥落させた町で、負けた敵の兵隊が行進するのがあった。同じなん

だ。日本兵はみんなうなだれていた。引揚げに遅れた民間人がこの様子を戸口で見ているが、みんな顔は涙に濡れ、まともな様子をしている者はなかった。横を銃を持って歩くソ連兵は何度も「顔を上げろ」って言った。それは長い列だった。

当時樺太には日本甜菜製糖豊原工場、王子製紙、炭坑（恵須取）、小さなかまぼこ工場があった。そこを逃げ遅れた人々は、そこで新しく来たロシア人に技術を教えろと言われた。他にも、鉄道員は鉄道の技術を、電気関係は電気を……。逃げ遅れた日本人はそのままそこにいた。ただ経営者が変わったただけだった。この日本人は一、二年いたらしい。

俺たちはソ連軍の捕虜になったが、ソ連軍は、これからみんなを船に乗せて北海道へ帰すと言った。それで日本兵はみんなできるだけたくさんお土産を持った。ロシア人に品物を取られるぐらいならというので、どの会社も、品物をみんなに持っていかせた。俺は同僚と二人で砂糖を一袋運んできて、持っていたトランクに詰めた。トランクの半分ほどになった。後は

軍隊の毛布が二、三枚だった。他の人は、軍の倉庫から自由に持っていったので、まず新品の軍靴を取った。二つも三つも持った者がいた。それから外套。夏だったが、冬の外套を着込むのもいた。それから毛布を何枚も。俺たちは豊原から大泊まで行進した。その距離は、ここ（わが家）から苫小牧ほどであった。そうすると、持ってきたお土産は重くて途中で持っていけなくなった。まず軍靴が道端に捨てられた。将校用の立派な外套も捨てられた。俺も砂糖の入ったトランクを捨て、毛布だけにした。こうして大泊に着いた。その港には、ここまで運んだが船に積んでもらえなかった民間人の荷物が、家の二階ぐらいの高さで、かなりの長さで山積みになっていた。ほかの国の人間がそれらをひっくり返していた。ソ連兵はそれを見ても何とも言わなかった。

ソ連の船に乗って小樽に行くことだった。船室も、船底も、甲板も、人でいっぱいになった。上甲板にも、二段組みのベッドのようなものがつくられた。二千人はいただろうか。十月二十一日、出港し

た。俺は甲板に寝た。日本に帰れるというので時々鼻歌が聞こえた。俺も嬉しかった。船は南へ進んだ。前方に利尻富士が見えてきた。利尻島は利尻富士とその裾野だけでできている島だ。利尻富士は高く千数百メートルはあった。でも、船は不思議なことに北海道と利尻島の間を通らず、利尻島の西側を走った。みんな不安だった。この船は利尻島と北海道の間を通るには大き過ぎるからだという噂がさつと流れた。不安なときには誰でも、いいように、いいように解釈したいんだ。航行していた船が停止した。夜が明けて見ると、それはノトロの岬（樺太最南端の岬）だった。みんなが固唾をのんでみると、ソ連の将校が数人、ボートに乗ってやってきた。間もなく、真岡（樺太南部の町 ホルムスク）の日本兵を乗せにこれから再び北上する、その後で小樽に向かうというソ連の説明があった。みんなようやく納得した。だが、北上した船は真岡に行かなかつた。そのまま北上し、突然真西に向かった。もう声を出す者はいなかつた。夜じゅう走っていた船が停止して夜が明けると、目の前に陸が見え

てきた。もしや小樽ではと思ったが、それは広い広い大陸だった。日の届く限り真っ平らな地平線が伸びていた。ロシアに連れてこられたのがわかつた。みんなの顔から血の気が失せた。

シベリアの名のみは知れど

茫々の大地に立ちて誰れも声無し

二、飢餓と死と重労働

そこは沿海州（間宮海峡を挟んで樺太の向かい側にあるシベリアの州）——〇三分所ポルト・ワニナだった。ポルトと言うのはロシア語で港という意味だ。そこは自然の良港で、狭い入り口から入ると中は広い湾になっていた。アメリカの大きな船が、小麦、ジャガイモ、豆などの荷を満載して入っていた。あの頃、アメリカとソ連は、共に日本やドイツと戦ったというので仲が良かった。船を降りていくと、日本人のようなのがアメリカの船から荷を降ろしていた。日本人かな、いや、いるはずないだろうと言いながら尋ねて見

ると、関東軍だった。満鉄で運ばれてきたということだった。しかし、禁じられているせい、それ以上は話そうとはしなかった。

俺たちはそこで整列させられた、あいうえおの順で。俺は「さ」の列だ。すると、俺の姉の亭主の弟もそこにいた。お互いにびっくりした。しかし、それぞれ別な部隊に属していたので、そのまま別々になった。

俺はこの後大体、このワニナの周辺にいた。これまで部隊はみんな一緒だったが、小さく分けられ、新潟や大阪の人間と一緒に仕事した。同じ部隊の者が一緒にいると反乱を起こすと思ったのだから。

仕事は船からの荷降ろし、森林の伐採、ブロックを焼いての家造りなどだった。向こうのブロックは、工場から出た石炭殻を砕いたものとセメントで作った。穴も開いていないため一個三〇キロもあり、とても重かった。それをガタンと型から落とす後、乾燥させるために外に運び出した。朝から晩まで、毎日毎日その重いのを運ぶのは大変だった。それで家を造った。

壁は、そのでかいブロックを二列に並べ、間に石炭殻を入れた。だから家の壁はものすごく分厚く、暖かな家ができた。ロシアの天井は、まず丸太を組み、その間にツンドラを詰め込み、上にまた土をのせた。そうすると本当に暖かくなった。その後、天井に漆喰を塗った。

それから、馬で伐採された木の藪出し作業もした。漁師だから馬など使ったこともないのに、やれと言う。馬は使えないなどとは言えなかった。馬を初めて見たのは子供の頃、母親の一番上の姉の家に行ったときだ。しかし、その人が、馬が蹴飛ばすときは後ろ足が一里も伸びるから近づいてはいかんと言った。だから、馬の後ろを通るときはぐるっと畑の中を回って行った。馬なんて触ったこともなかった。それでも「さあ、やれ」と命令されるとはしないわけにはいかなかった。まず木を二本、根っこの丸いところをつけたまま切った。それを轆なぐえにし、横に太い棒を一本つけて轆なぐえができ上がり。それに切り倒した木を縛り付けて下ろしていった。それは大変な仕事だった。その上、向

こうの馬の首輪は日本と違って上で留めるようになってるので、小さい日本人には大変だった。四年間で何十種類もの仕事をやった。

素裸の尻ひと捻り労働の等級毎に選別される

ロシア人は、我々日本人をシベリアに連れてきて強制労働をさせるのを、かつて日本に占領されたことへの報復だと言っていた。大正七（一九一八）年、ロシアに社会主義政権ができた時、日本、アメリカ、フランス、イギリスが軍隊を送ってそれを潰そうとしたんだ。日本は七万三千人の軍隊を送って、東シベリアを抑えようとした。その時のことを言っているんだ。

貨物船から、寒さで冷凍になったキャベツを運んだ。運ぶ途中、氷に覆われた葉っぱの部分が道路に落ちた。「仕事終わり」と言われたとたん、みんなは地面に上半身を伏せ、両腕でその凍った葉っぱの破片をかき集め、ポケットに入れた。後でそれをばりばり言わせながら食った。それはベッドに入ってからの楽し

みだった。食い物を手に入れたときは、どうやってその人に見つかからずに食うかがむずかしかった。

食い物というと、ロシア人の残飯の捨て場が歩哨の立つ向こう側にあった。そのまま捨ててあるが、シベリアなので、凍っていて腐らなかつた。天然の冷凍庫だった。夜、すばしこいのが、周囲に立つ歩哨が向こうを向いた隙に飛び出した。向こう側に行くともう大丈夫だった。残飯の捨て場所にある大きめなものは何でもかんでも袋に詰め込んで持って帰った。小屋に帰ってみんなで分け、溶かして食った。

ソ連はすべての力を軍事力に向けていたので、戦争が終わったときは全土、飢餓状態だった。それで俺たちが普段食うのは高粱コウライソウの粥と塩ニシンか塩鮭が一切れ入った汁だった。みんなはいつも蓋を切り取って、針金でつった缶詰の缶を腰のベルトに下げていた。それはどういうわけか、ダワイ缶と呼ばれていた。ロシア兵が俺たちに怒鳴って言う言葉も「ダワイ、ダワイ」だった。俺たちはそれに食べ物を入れてもらった。粥の代わりに黒パンを一切れもらうこともあつ

た。黒パンの大きさは人間の親指よりちょっとだけ大きい、あのマッチ箱の大きさだった。人間の最低必要カロリーの半分しかなかった。ロシア中が飢えている時だったから、日本人の捕虜に食わせるどころじゃなかったんだ。シベリアで日本人の捕虜が六万人死んだが、大抵は最初の一、二年のことだった。体力のなくなった者から死んでいった。捕虜はもともと二十歳から三十歳前半の者だから、そうたやすく死ぬわけないのだが、バタバタ死んでいった。食い物の絶対量も不足したが、野菜がないからまず脚気になった。歩いていても足が上がらなかった。それで、その辺に少しでも食べそうな緑があるとそれを食った。しかし結果的に見ると、そんなものを食った者の方が先に死んでいった。

昔、白砂糖と黒砂糖の間に中白ちゆうしろという砂糖があった。今のザラメの色だ。何かの仕事で凍てついた地面を掘っていると、ある時、その中白が顔を覗かせた。それが土くれであることはわかっている、本当に中白ではないのか、手にとって確かめなければすまな

かった。あるとき仕事からの帰り道、薄暗くなった道路の上に凍ったジャガイモが点々と落ちていた。全員がみんな、本当にジャガイモだと思った。しかし、よくよく見るとそれは道産子の糞だった。道産子の糞は小さいから、俺たちのもろう小さなジャガイモに見えたのだった。食い物の事情は一、二年するとよくなった。

労働はきつかった。木の伐採作業は大変だった。ロシアの鋸のこぎりはピラーといい、二人が木を挟んで両側に座り、かわるがわる引くものだった。俺たちは一生懸命に引っ張るのだが、腹もへり、体力もないので、ロシア兵がどんなに怒鳴っても仕事ははかどらなかつた。業を煮やしたロシア兵があるとき、「どけっ」と言っ自分で引き出した。しかし相手は体力のない日本人だから、日本人は鋸と一緒に体を引っ張られるだけで、引き戻すことができなかつた。木の伐採作業で死ぬのが一番多かつた。

足萎えて歩行も難き友見捨て

作業現場へ駆りたてられる

あるとき、俺はロシア兵に殺されそうになった。みんなで枯れ木を集めるように言われた。俺は枯れ枝を求めてみんなから百メートルほど離れてしまった。見張りがやって来て、違反（逃亡）だと言って、俺に銃口を向け、撃つ構えを見せた。おれは背中が凍った。日本人の上官からも、違反は殺されても文句は言えない、それは国際法でも認められていると言われていたし、こんな場面をよく見ていたので、もう駄目かと思つた。手が胸に当たつた。その内ポケットにパイロットの万年筆があつた。これは出征の時、文房具屋の親父さんが、もう手に入らなくなったものだが、最後の物を残して置いたのだと言って、俺にくれたものだ。俺はそれを「○○サルダート（○○兵殿）」と言つて、そのロシア兵に手渡した。ロシア兵はキャップを取つて試し書きをしていたが、満足した風になかつた。俺はもう一つ隠していた。シベリアに着いたとき持ち物は全部没収されていたが、兄貴からもらつ

た金の時計をももひきの紐を通す穴に隠していた。ももひきを破つてそれを取り出して渡した。見張りの兵隊は金時計を手にとると、最初だから大目に見てやるというようなことを言つて、俺を解放した。

ソ連兵は字も読めず、計算もできなかった。五列に並ばせても掛け算ができず、何度も間違え、全員いることが確認できるまで寒さの中で長い間立っていなければならなかつた。

寒さというと、テントの収容所の天井につららができた。寝る時は凍えているのに、夜中に天井を見るとき、人間の息でできたつららが何十本もできていた。

井戸と便所はもうしばれて大変だった。井戸から水を汲み上げるとき、跳ねた水が氷になつて井戸の横壁にくっついた。それは段々厚くなつていつて、終には水を入れたバケツがようやく出てくるだけの小さな穴になり、塞がってしまった。そうなるとツルハシで氷を砕き、最後は井戸の中に入り込んで、井戸の底に落ちた氷の塊をモッコに入れ、上の者が引っ張り上げた。樺太とは違い、同じ緯度にあつても大陸性の気候

のシベリアは大変だった。便所でも同じことが起き、
本当にひどい目に遭った。

俺たちは天幕小屋の中で、持っている全部の衣類を
体に巻き付けて板張りの寝台で寝た。最初の頃は、お
互いの故郷のことや、家族の様子などを話し合っ
て空
腹を紛らわせていた。だが暫くすると、話すことも次
第に途切れがちになり、やがて静まり返って、みんな
の目だけがぎらぎら光った。俺たちの吐く息が天井か
らつららになって伸びてきて、無数の寒気のとげが鎌
のように全身に突き刺さってきた。そうすると、次第
にあちこちで、動かなくなる数が増えていった。その
うちに自分たちも、抵抗できないような激しい眠気に
襲われた。隣の死んだ友を見てもなんの感情も湧か
ないし、涙も出ない、もちろん声をかける気力もない。
故郷のことも、身内のだれかれのことも、自分が死に
直面しているという恐怖の意識も薄れていってしま
う。急に体の上に重いものが乗っかかったような感じ
がして目が覚めると、ソ連の歩哨が、死んだ人たちの
着ていた毛布をはぎ取って、生きている者へかけて

やっていった。後で思うと、まさに生死の境をくぐり抜
けて生き延びたんだ。

冬に死ぬと、埋めてやれなかった。緯度はそれほど
高くないのに、大陸は、樺太とはまるで違った。今で
も冬にシベリアから寒気団が来ると日本中が震え上が
るが、それ以上なんだ。冬じゅう、凍えていた。死ん
だ人を埋めようにも、地面が掘れなかった。五メート
ル下まで地面がしぼれていた。それでどうするかとい
うと、死んだ者はそのまま大きな部屋に積んでおい
た。どの死体も真っ裸だった。死んだ者に服は要らな
いからだ。俺たちに配られた。大きな部屋にマグロの
ようになつた死体が山になっていた。春がきたときに
は形相が変わり、友達でも、もう誰だかわからなく
なっていた。少ししばれが溶けてくると、地面にハッ
パで穴を開け、死体を埋めた。

弊れたる友に手向ける花も無き

異国の丘の凍土に葬る

ベッドの板の上には藁布団ならぬ草布団しかなかった。シベリアに青い草が見えるのは短い夏の間だけだ。布団の草は自分で集めなければならなかった。仕事の行き帰りなどに草を見つけるとそれを手でむしり、ポケットに入れて帰った。素手でやるのだから手の脇はいつも傷ついて痛かった。そうしても草はすぐ枯れ、草は布団の隅に寄ってしまった。いつも凍えていた。自分の持ち物は身につけているものがすべてだった。普段は服の上に外套を着て、その上にソ連軍から与えられたシューバ（ロシアの外套）を着た。夜はそのまま寝た。ソ連軍からもらった毛布を一枚掛けるだけだった。

収容所の中は虱しろみと南京虫だらけだった。服の袖をめくると虱が何十匹となく出てきた。到底取りきれれるものではなかった。どうにも我慢のできないときは、寒いが、着物を外に出して寝た。次の朝に行つてみると、着物一面、赤い虱の死骸に覆われていた。でも二、三日するともう元に戻った。収容所は大きなテントでできていた。中にストーブが一つ置かれていた

が、あの樹木の豊富な国なのに半分腐ったような古い薪しかくべられなかった。いつもくすぶって煙たいばかりで、少し離れるともう何の役にも立たなかった。それでもテントの中にはたくさんの人間が入っている。夜は少し暖まった。ベッドに寝ていると、暖かくなったテントの天井から南京虫が顔の上にスーッと落ちてくるのがわかった。南京虫は目に見えるか見えないかぐらいのちっちゃなものだが、それでも二、三匹いただけでも痒いのなんのつて、虱どころじゃなかった。だが、ボリボリ掻きながらも、昼の疲れですぐ眠ってしまった。

寒くなると夜、何度も小便に起きた。あるとき数えてみると八回も起きていた。多いのになると十二回も小便に行く者がいた。外に出ると、寒気が体にブスーブスーと刺してきて、一遍に目が覚めた。一時間ごとには起きていることになるのだが、ベッドに戻るともう眠っていた。

最初のうちは、病気になる、まだ日本まで生きて帰れる者は帰した。仕事もできないのに飯だけ食わせ

ておく訳にはいかないというのだ。日本までもたないような者はもう帰さずに、死ぬのを待っていた。

食糧を配るのは当番に当たった者だ。当番の者がダワイ缶に分けて入れていった。みんなが目を皿のようにしてそれを見ていた。少しでも多いのや少ないのがある、やいのやいのと声を荒げるので、当番はよそから取ったり入れ足したりして、何度でもそうやり、みんながウンと言うまで均した。それが、ほんのちよっぴり感じの違うものを、長いときは三十分もかかるときがあった。よそではもう食い終わっているのに、まだ配分が終わらないときがあった。

ある時、みんな集められ、酒を飲まない者は手を挙げると言われた。手を挙げた方がいいのか、挙げない方がいいのか、少しだけ挙げたまま決めかねている間に見つけられ、列の前に出させられた。ロシア兵の後について行くと、貨車の引込線に出た。そこにアルコールを入れたタンク車が止まっていた。貨車の中のアルコールを外の大きな桶に移すのが仕事だった。貨車のタンクの中に入り、柄杓で桶に入れ、それを外に

運び出した。アルコールの匂いでもう頭がおかしくなった。小屋に帰ると、みんながどんな仕事だった？と寄ってきた。説明すると、アルコールを絶対にとって来いと言う。監視兵と一緒に行くのでそんなことできないと言った。何日かすると頭のいいのがいて、シューバを着て行って、それをわざとアルコールに落とし、アルコールを沁み込ませてきたらいいと言った。仕事も終わる頃、わざとシューバをタンクに落とした。監視から殴られはしなかったが、随分どなられた。小屋に帰って絞ると、なんとバケツに半分ほど出た。シューバは中が綿になっているから、思ったより多く沁み込んでいた。酒を飲む者は本当に喜んだ。だが次の日、俺はもう別の仕事へ回された。

アメリカ船から小麦粉の袋を運び出す作業もした。アメリカの小麦粉は、当時の日清製粉の粉よりもずっとよかった。運びながら袋に穴をあけて、少しこぼして歩いた。そうして昼休みになると、口に水をいっぱい含んでいって、掻き集めた小麦粉の上に吐きかけた。それをこねると、固まった。それを物陰に隠して

おき、帰りになると腰の回りにぐるっと巻いてバンドで締めたり、帽子の中に隠したりした。もちろんズボンの下を縛って、その中に小麦粉を入れる者もいた。両足にズボンがばんばんになるほど小麦粉を入れた奴がいたが、立ち上がれなくて見つかり、ぶったたかれだ。日本の粉は水をつけるとすぐ切れたが、アメリカのは伸びた。それはつきたての餅のような感じがした。

収容所に学校の先生がいた。あるとき、その先生が、ロシア人の家の天井一面に鮮やかな色で天使の絵を描いてやった。ロシア人はすっかり喜び、先生は大きなパンをもらった。みんなが瘦せ細っている中で、その先生だけは肥えていた。特技を持つ者は優遇された。貨物船から貨車を移す作業をしていた。ロシア人がウィンチで一旦荷物を地面に下ろし、俺たちがそれを貨車に積み込んだ。ある時、日本人がウィンチを扱い、ウィンチを振るようにして荷物を直接船から貨車に移した。喜んだロシア人から、お前はノルマを三〇〇%達成したと言われ、大きなパンをもらっ

た。俺たちはいつでも、「お前たちはノルマを七〇%しか達成できない」と怒鳴られていた。

よく港の荷役の仕事をやらされた。一袋六〇キロの重さのものを、一日じゅう腹をへらして運んだ。塩漬け秋アジ（鮭）がどっさり船で運ばれてきた。函館に本社があった日魯漁業がカムチャツカで漁獲した塩鮭を運んできたのだった。俺たちは船底へおりて、そこで魚を積んだ。それは上へ引き揚げられた。そこには便所がなくて、最初は隅っこの方へ行ってやったが、そのうちもう好きなどころでできるようになった。それは人間の口に入るものなのだが、そんなことは平気になった。仕事の帰りには、仲間を持ってやろうとその塩鮭を盗み出した。塩鮭を紐で縛って背中に入れたり、腰のベルトに挟んだり、両足のズボンの中に入れたりした。収容所の前には衛門所があった。ソ連の兵隊が怪しいと思う者の背中を叩いたり、脚のズボンを叩く者がいた。見つければもちろんさんざんぶん殴られた。中には見逃してくれる衛兵もいた。

俺たちは食事にその塩鮭を一匹もらった。それを船

の蒸気の出るところへ持って行って、ジュッと一遍で溶かした。それを二、三度やってから食うのだが、しょっぱくて、後で水がぶがぶ飲んだ。そんなものばかり食っていると黄痘おうたんになった。俺も黄痘になった。飯時には、高粱粥と黒パン五〇グラムほどが与えられていた。しかし熱のため、支給された半分腐ったような高粱粥が、どうしても喉を通らなかつた。当時隣のベッドに、故郷の学校の同級生であつた杉沢新一君がいた。彼が俺の高粱粥を食べ、代わりに黒パンをくれたので、いぶん助かつた。後年、杉沢君は製麻会社伊達・虻田工場長として伊達に駐在した。このことが縁となつて、俺も伊達の住人になつた。思えば奇妙な縁であつた。それと、医務室とは名ばかりの部屋にいた樺太か千島部隊の病院長だつたという久保とかいう軍医中佐（聞くところでは、北大医学部の教授か助教授であるとのことだつた）がいて、少ない薬品の中から効く薬を俺にくれたので全快することができた。今でも心の中で感謝している。

「大みそかのごちそうは豪華版らしい」。こんなう

わさが半月も前から流されていた。捕虜として労役していたが、晴れた日には北樺太の山が遠くにかすんで見えた。寒氣と空腹、かゆさを通り越して全身がほてる感じの虱や南京虫に悩まされ、幾度、これが夢であつてくれればよいと思つたことか。普通夕食は六時ごろだつたが、大みそかは大盤振る舞いのために二時間以上遅れるという炊事係の説明だつた。材料は、配給から少しずつ削つて残していたという。俺たちはお互いの故郷の正月を語り合ひ、最後は食べ物話となり、ぼたもちだ、おはぎだと延々議論して午前零時もうとうに過ぎ、空腹と睡魔にうとうとしたころようやく食事となつた。待ちに待つたごちそうは、定食の高粱粥のほか、口取りに直径八センチほどの丸いパン、ゆでジャガイモをパン粉とこねて長方形にした生菓子風、それに大豆のキントンであつたと思うが、記憶はもう確かでない。何より量の多いことを喜んだ。かすかな甘味もあり、俺たちはむさぼるように味わつた。時刻はすでに元旦の夜明け間近だつたのである。毎年大みそかのごちそうを前にすると当時のことがよみが

えり、地獄絵図のような悲惨な環境の中で倒れ、シベリアの荒野に屍をさらした多くの友が偲ばれてならぬい。

体が悪いため、一カ月程軽作業に回されたことがあった。仕事は、普通作業に出る人たちの朝・夕の食事の後始末や食堂掃除が主な仕事だった。ある日の夕食時のことだった。普通作業員の一人が「腹の調子が悪い」と言っていて、黒パンの皮の固い部分を、一口ほどテーブルの上に残して席を立った。その瞬間、あたりを掃除していた四、五人の仲間が、獲物を狙っていた禿鷹のように、間髪を入れずにテーブルへ殺到した。俺もその中の一人だったが、パンを素早く口中に押し込んだ奴の顔を、全員が恨めしそうに見ていた。その光景は今でもはっきり浮かび上がる。ここには俺よりも年配の者が多く、名前を言うのは憚られるが、満州建国に関係した文官や、最高法院の裁判官、満州建国大学の日本人教授たちも沢山いたんだ。

今から考えると何とも滑稽であさましいことであるが、あの時は他の人間よりも一口でも多く食うことし

か考えなかった。すべては食うことに向けられていた。「どうぞお先に」などとやっていたら、真っ先に死ななければならなかった。食うということの前では、全ての教養が消えていった。

日本人捕虜に対する食糧の支給は一日分だけと決まっていたので、炊事係は毎日、数十キロある距離を馬車で受領に通っていた。だが、シベリア特有の猛吹雪が続くと、俺たちは吹雪が止むまで何日も何も食えなかった。そんな状況の中でも、一日目は食事なしで作業に出された。だが二日目からは仕事にならないので、作業も中止になった。

俺たちは広島と長崎に特殊爆弾が落ちたことまでは知っていた。それからはもう日本のことは何も聞けなくなった。ソ連兵が、日本はもう全滅だと言っていたので、本当にそう思っていた。親や兄弟もみんな死んだのではないかと思っていた。シベリアでは、一番近くの集落でも長和や有珠（二つとも伊達市の一地域）などではなく、どこにあるかわからないほど遠くにあったので、収容所から逃げ出そうなどと考える者は

もともといなかった。だが、ソ連兵はそれでも安心できず、日本はもうないんだ、帰るところはないんだと思わせることで、逃げ出さないようにしていたようだった。シベリアに来てずいぶんたったある日、仕事からの帰りに、ある家の前を通った。するとその家から「千代ノ山（ちよのゝやま）」というラジオの音が聞こえた。相撲の実況放送で、短波で送られたきたんだ。千代ノ山は故郷の福島（北海道南部の町）の力士で昔から知っていた。日本で相撲をやっているのを知ったとき初めて、日本はまだあるんだということがわかった。

名も知れぬ異国の丘の偲び草

年はめぐりて春は来たれど

俺たちは親しい者同士で、帰った者は互いの家に無事を知らせようと言っていた。しかし、何度も何度も再編成されるのでバラバラになってしまった。家に帰ったときわかったが、親は俺の消息を全く知らない

でいた。あるとき、ロシア兵がみんなに、お前たちの手紙を出してやるから国へ手紙を書くんだと言って小さな紙をくれた。俺たちはみんな書いた。しかし誰にも返事が来なかった。あれで何を調べたんだろう。

ある日、日本の将校の集団が町を通って行くのを見た。あれが元将校かと目を疑うばかりだった。将校というどびかびかに磨いた長靴を履き、最高の品質の将校外套や軍服を着用し、将校帽を被り、スリッパ爽と肩で風を切って歩いたものだ。ところが今は将校服も汚れてよれよれになり、どうした訳か帽子さえ破けており、みんな青い顔をして表情なく、話すこともなく歩いて行った。まず将校のプライドを打ち壊すのが目的で、一番酷い労働をさせられたんだろう。

俺は大体はワニナ周辺にいたが、バイカル湖（シベリア中部に位置する湖）の氷の上を走るシベリア鉄道建設に行かされたこともあった。ワニナからバイカル湖までは、ちょうど日本の北の端から南の九州ほどの距離があった。バイカル湖は、北海道の半分は入るほどのどっかい湖で、南北に細長く延びていた。だが、

南寄りにくびれたところがあった。その氷の上に冬季用の貨物鉄道を敷くんだ。鉄道といってもたくさんの荷を積んで氷の上を走るので、汽車自体はそれ程大きくなかった。春になってくるとそれを取り外した。取り外すときには、氷が割れて落ちた場合のことを考えて、救助用の車が待機していた。スターリングラード（最も激しい独ソ戦が行われたロシアの都市。ドイツの敗北はここから始まった）で捕虜になった者であるるか、そこにドイツ人がいた。ユーラシア大陸の西の端からここまで連れてこられたのだ。生きて帰れた者はあまりいなかっただろう。

三、帰国

時々ロシア兵が紙を手を持って近づいて来た。するとみんな、自分が呼ばれないかと期待した。そこで名前を呼ばれた者は日本へ帰された。俺はそうして四年待った。四年にもなると、もう日本兵は相当少なくなつた。死んだり、帰つたりしたんだ。俺たちは何に對しても無関心になつた。もう何にも期待しなかつた

し、何も考えなかつた。死ぬことも考えなかつた。ただその日だけを生きていた。四年目も終わろうとする九月頃のある日、五、六人で木の伐採作業をしていた時だ。ロシア兵が近づいて来て、「サトウ、サトウ」つて俺を呼んだ。ロシア兵も、いいことを伝えるのは嬉しいのだから、にこにこしていた。俺が出ていくと、俺の体に腕をかけ、「サトウ、ダモイ、ハラシヨ（家に帰れるんだ、よかつたな）」と言つた。俺はそのまま収容所に帰つた。そこで使い古しの飯盒を一個もらい、それを肩掛け鞆に入れた。

俺たちはハバロフスク（シベリア東部の町）に集まつた。あいうえお順に整列した。すると、ワニナで最初の日に会つた姉の亭主の弟にまた会つた。二人は本当にびっくりした。もちろん四年の間の重労働や日焼けや雪焼けで顔はすっかり変わつていた。俺たちはそのまま一緒だった。俺たちは約二千人程だが、貨車でナホトカ（日本海沿岸の町）へ連れて行かれた。ナホトカに着くと、二万人程が日本から来る船を待つていた。テント小屋がたくさんできていた。そこで二カ

月程待たされた。

四年半働哭の地に生きぬきて

今恵山丸ナホトカ出航す

昭和二十四年十一月、日本からの船を待っていたナホトカの幕舎で次のような言葉を練習させられた。

「ダスビダーニヤ・ソビエトスキタワリシンチ・ボルショイスパシーボ（さようなら、ソビエトの同志の皆さん、どうも大変ありがとう）」日本人がどんな気持ちでこのロシア語を練習していたかは想像にまかせ。捕虜にされて辛酸をなめた俺たちが、なぜソ連に感謝しなければならぬのか、などと反問できるような状況ではなかったんだ。

ソ連への感謝というと、平成二年の新聞に、シベリア抑留の日本人捕虜に関する未公開の資料が明らかにされたことが写真入りで報道されたことがある。その数枚の写真の中にも、当時の自分をそのままダブらせて見たものが四枚あって、記事を読み終える四、五分

の間、約四年五カ月に及んだ抑留の光景が渦巻くように頭の中で回転した。その記事の中に、「スターリンに感謝の署名を奉呈する」というのがあったが、当時の説明ではたしか、日本人の署名と赤いもみ布に金泥で書いた感謝文と一緒にして、彫刻した箱に納めて持参するのだということだった。彫刻する模様はいろいろ案があったが、日本の童話から『舌切雀』だかの案が選ばれた。桃太郎の鬼退治も話に出たが、これは侵略的だという理由で採用にならなかったという。しかし、最終的にどうなったかは知らない。

ナホトカから舞鶴までは二日かかった。明け方だった。天の橋立が見えると言う声が上がった。天の橋立が遠くにちっちゃく見えた。その周囲は緑色の松の木に囲まれていて、シベリアの灰色の景色とは全然違っていた。俺は本当に日本に帰って来たんだと思った。

寝もやらずデッキに立てば薄明に

故国の山河涙にかすむ

俺たちの船は舞鶴に着いた。九州の方に行く船もあったが、大抵は舞鶴だった。船を降りるとき、アメリカ兵にDDTを体じゅうにかけられて真っ白になった。港から宿まで行ったが、俺たちの左右には、名前を書いた旗とか看板を持った人々がびっしりいて、口々に、「うちの○○は知りませんか」と聞いていた。俺たちは海兵隊の建物に連れていかされた。そこに一遍に百人も入れる風呂があった。そこで垢を落とし、新しい衣服をもらった。舞鶴で千円ももらった。大金だと思った。そこに一週間ほどいなければならぬということで、家に知らせようと葉書と万年筆を買った。万年筆は二百円といくらかした。元の兵舎内に店があって、サツマイモを薄く切って干した芋せんべいが一袋三十円で売っていた。俺たちはありったけの金を出して芋せんべいを買って、靴の中、ありとあらゆるポケットの中に突っ込んだ。店の人が、「兵隊さん、こんなものはどこでも売っているから、そんなに一遍に買わないでもいいんだよ」と言ったが、聞くもんじゃないなかつた。その後は芋せんべいばかり食って

た。

道庁から迎えの人が来た。よその府県からも来ていた。姉の亭主の弟は東京に家族があるので、東京の組で帰っていった。俺たちは裏日本を通過して行くのだが、まず京都に行った。京都駅でミカンとリンゴを売っていた。その色の鮮やかなことつたらなかつた。もう買ひ金は残ってなかつたが、その色は今でも忘れられない。待ち時間があり、駅の外に出た。宗教関係の婦人団体が帰還者にふかしサツマイモを配っていた。二個ももらった。

青森から函館まで船に乗った。客室は船底にあつたが、半分腐つたような音が敷いてあり、貨物船の船倉のような感じがした。甲板には大きなふろしき包みを背負った女の人們が足の踏み場もないほど乗っていて、戦後初めて見る祖国の人們たちの生活ぶりに、人も船もなりふり構わず生きていることを実感した。船中で道の職員からももらった一個のキャラメル、カボチャ、イカの缶詰一個は、当時としては国が俺たちにしてくれることのできた精いっぱい慰めであつたの

かと思う。それを思うと今でも胸に込み上げてくるものがある。俺は、缶詰だけは家へのお土産に持って帰ろうと思ったが、みんなうまそうに食うので、とうとう我慢できなくなり、缶切りで蓋を開けてもらった。中にはイカとカボチャを一緒にしたものが入っていた。ものすごくうまかった。

船には買い出し人がたくさんいた。背中与胸に一俵ずつ担いでいる者もいた。向こうには警官が待ち構えているが、既に打ち合わせができていて、着くと二、三十人さっと寄って来て、素早く荷物を分けて散っていくんだ。だから警官が一人や二人いたってどうしようもなかった。この青函連絡船は昭和六十三年に廃止されることになったが、俺の姉は、旧国鉄運輸以前の青函連絡船で生まれたそうだ。船長さんが名付け親になって、船名そのままに「イクタ」と命名したというが、船名の漢字はわからない。その後、子供たちの進学、就職、結婚と、随分連絡船を利用したが、船も設備も一年ごとに豪華になって楽しい旅だった。その度ごとの思い出は、今でもアルバムの中に姿を残してい

る。連絡船が津軽海峡から姿を消したが、青函連絡船は俺の心の中ではいつも白波を蹴立っているんだ。

駅では母親と姉が待っていた。そこで初めて、親父は終戦の次の年に死んでいたことを知った。俺を見ると、「この未熟者めが、お前などは兵隊になれない」と言って叱ってばかりいた父親だった。舞鶴に着いたのはまだ十一月だったのに、家に着いたときはもう十二月になっていた。役場からは誰も出迎えに来なかった。役場に行くと、おれはまだ生死のわからぬ三人のうちの一入だったと言われた。

右手の中指の爪は今でも裂けているが、それはシベリアの抑留生活の時にできたものだ。食用油がドラム缶に入っていた。それを黒パンに潰けると美味しいというので、穴の開いたところから指を突っ込んだ。その途端凍傷になり、しまった、と思ったがもう遅かった。五本の指が全部黄色くなった。その後、爪が全部抜けた。後で再び生えてきたが、この中指の爪だけは割れたままだ。それから何年間もヤスリをかけて平らにしてきたが、どうしてもくっつかない。

昭和二十年の十月から二十四年の十月まで四年間もシベリアで働かされた。いいことは何もなかった。そんなことは経験しないに越したことはないんだが、人間はどんな条件のところでも生きられることを知った。だからそれ以来、どんなことが起こっても耐えられるようになったと思っ

テレビニュースで、アフリカの難民の子供の一本の棒のようにやせ細った下肢を見ると、あの頃の自分と重ね合わせて、暗然とした気持ちになってしまふ。終戦の頃は六十キロ以上あったが、昭和二十一年四月のソ連側の身体検査の時はたった三十八キロしかなかった。

平成元年の八月だった。強制抑留を慰労するという書状と銀盃一個を政府から贈られた。何とも形容しがたい異様な体験だったが、俺もすべてを恩讐の彼方に忘れようとしていた時だったので、一つの区切りとなった。凍土に葬られたまま故国に帰れない戦友の無念を思うと後ろめたい気もしたが、憎悪に生きることが憎悪を生むだけであることがようやく理解できるよ

うになったから、俺もやっとそれを受ける気になった。同じ年の新聞に、旧日本兵のシベリア抑留問題を見直す機運がソ連の一部歴史家の間に生まれ、全国抑留者補償協議会とソ連在郷軍人会との間でこの問題をめぐる共同シンポジウムの開催構想が具体化しつつあるという記事が載ったことがある。戦争は、国内的にも国際的にも超法規的にエスカレートしてしまう魔物のようなところがあるから、双方がそれぞれに自国の正義を当てはめようとする愚かさを繰り返していては、戦争に対する本当の反省はできないと思う。両国関係者によるシンポジウム開催は、当時のソ連のペレストロイカ（改革）の一側面だったのだろう。俺は今でも過去の一切の怨念を超えて、戦争の悲惨さを伝えるために真相解明が必要だと思っ

ている。食べ物に何不自由なく暮らしている今の日本人には、俺たちがシベリアでした無様な行動は、むしろ滑稽に見えるかもしれない。しかし人間は、生か死かというぎりぎりの一線上に同じ条件で立たされると、教養とか、地位とか、名誉とか、自尊心などで保たれて

いる理性は、惨めに崩れていってしまふ。これは空腹の極限を味わった者でなければ理解できないだろうと思う。人間社会の互譲の精神とか謙譲の美德などが崩れる時は、何よりもまず、自分たちの生活周辺から食糧が欠乏していく時だと思ふ。

寒さと飢えから意識が朦朧もうちろうと薄れていくような極限状況から生還してもう半世紀以上たった。でも、今でも疲れた晩にはきまづ、シベリアの原野をあてもなく歩く夢を見てうなされる。母ちゃんが生きていた時は、夜中によく起こされた。当時の生き地獄のような生活を思い出すと、自分が今生きていることが本当に不思議な気持ちになる。シベリアの凍土の下に残してきた戦友を思うと、俺は死んでも、華美な葬式をして欲しいという気持ちにはなれない。

老いて尚閉する臉に浮かびくる

命の疼く虜囚残像

命あることを哀しと思ふ日も

ありたることを懐かしみ老ゆ

【執筆者の紹介】

以上は、父が語ったことを、息子の河野富士夫が文章化し、その内容について改めて父の確認を得たものである。さらに、父が詠んでいた短歌の中からシベリア抑留に関するものを抜き出し、関係する部分に挿入した。

(宮崎県 河野 富士夫)

(旧姓 阿部)

シベリア抑留

九死に一生を得た

東京都 清水 友平

毎日夕方六時になると決まって空襲警報が鳴り、B29が島根県の上空を通過して、一時間後には必ず清津港に飛来する。そして何発かの機雷を投下してから、